

都道府県別賞一等

私の家庭と生命保険

大分県 佐伯市立佐伯南中学校 二学年

丸山 弥優

私は今、お母さんとおばあちゃんと一緒に女三人で暮らしています。おじいちゃんは施設に入っています。

私の家庭で仕事をしているのはお母さんだけです。私は中学生で、おばあちゃんはまだ七十歳になります。お母さんはほとんど毎日残業をして帰ってきます。土曜日は、休みなのに仕事に行くことも多々あります。でも、中学の授業参観や運動会、文化祭等があるときには必ず仕事を休んで見に来てくれます。本当は大変で疲れているはずなのに、いつも笑顔で私たちに優しくしてくれています。とても凄なお母さんです。

つい先日のお話です。私の友だちのお父さんが亡くなりました。その友だちは水泳部に入っていて、県大会に出場していたため、市内にいませんでした。誰かからしらせを受け、県大会が終わって急いで帰ったそうです。突然の死は言葉にすることができない程悲しいものだったと思います。私はお通夜に行くことができませんでした。本当は行きたかったのですが、お父さんが亡くなられてしまったことを知ったのも、お通夜があることを知ったのも少し遅かったため、間に合いませんでした。その子は、とてもよく笑う人でした。誰に何を言われても笑っていて、強い人だと思ったこともありました。泣いている姿なんて、全く想像が付きませんでした。そんな彼が、お通夜のときにはたくさん泣いていたそうです。ずっと、ずっと、泣いていたそうです。

この話を聞いたとき、私の目からは自然と涙がこぼれていました。私はまだ身近な人の死を経験したことがないので、どれだけ悲しいのかはわかりません。でもきっと、その悲しみやつらさは私の想像よりはるかに大きいものでしょう。何で彼のお父さんが、とか、笑えなくなっていたらどうしよう、等と考えただけでも涙が出てきた私です。もし私のお母さんが死んでしまったらなんて、つらくて想像することもできません。

しかし、いつ事故に遭うかも、いつ病気になるかも、誰にもわかりません。いつ死ぬかなんて、誰も教えてくれません。もしかしたら、明日事故に遭って死んでしまうかもしれません。もしかしたら、来年には病気にかかって死んでしまうかもしれません。その「もしかしたら」のことが起こったときのために、お母さんは終身保険に加入しています。お母さんが今日、事故に遭って亡くなってしまうとします。すると私の家庭では収入がなくなってしまう。私が

第54回中学生作文コンクール

高校生以上なら働くこともできるのですが、中学生だと仕事もできません。ましてや、中学ではお金がたかつかってしまいます。それまでの預金だけで暮らしていくのは少し難しいと思います。しかし、お母さんが生命保険に入っている場合、私が受取人になっているため、決まった額が受け取れます。すると、安定した生活を少しでも長く送ることができるのです。

事故に遭ってしまう、重い病気にかかってしまうことは、一部の人だけに起こっているようですが、誰にでもありえることです。いつか自分に起こるかもしれません。起こるか起こらないかなんてわからないけれど、私はもしものときのために、保険に入ることとはとても大切なことだと思います。

だから私は、大人になったらお母さんのように、大切な誰かのために保険に入りたいです。そして、今のようにな幸せな家庭をつくっていききたいと思います。